The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜近さ＞としてのインタビュー : インタビューとレヴィナスについての試論
Author(s)	岸田, 智
Citation	メタフュシカ. 2003, 34, p. 109-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈近さ〉としてのインタビュー

――インタビューとレヴィナスについての試論――

岸田　智

本論は、会話の中でも比較的特殊な形式であるインタビュー[1]に注目し、インタビューが他者との言語コミュニケーションとして、どのような性格を持つ行為であるのかを見定めることを目的とする。その際、我々はレヴィナスの思想を導きの糸とする。論の構成としては、まず前半の第一～四項で、実際のインタビューの現場から思考を立ち上げることを目指す。ここでは筆者が従事した雑誌記者の経験が基にある。続いて後半の第五～八項で、前半に跡づけた現場の思考といったものをレヴィナスと照らし合わせながら、より詳細な輪郭を描くことを目指す。

一　会話という営み

インタビューとはどういうものかを考察するに先立って、インタビューも言葉[2]を用いた会話の一形式であるという観点から、我々が言葉を使ってする会話がそもそもどんな行いであり、そこで何が起こっているかを考察することから始めたい。この作業を経過することで、インタビューとより一般的な会話との違いも明らかとなるだろう。

会話とは何か。それは、多くは二者間によってなされる言葉の発話のやり取り、発話行為の連鎖であると、とりあえずは定義できよう。私が、誰かとどこかの場所で会い、話し始める。その時、私は何か意味のある言葉を相手に話し、相手もまた私に意味のある言葉を返す、その連鎖が会話であろう。と、すると会話には、会話者が相手に向かって発話することで成り立つという行為としての側面と、発話する、話す、すなわち言葉で何事か意味ある内容を伝えることとしての、発話された言葉の意味内容の側面との、少なくとも二側面があ

ることになるだろう。

会話を行為として捉えたときの特徴としては、以下のような点が挙げられるだろう。すなわち、①会話は話者同士の、言葉を使った何がしかの情報伝達行為、相互行為である、②特定の二者がその行為の当事者となる（この私とこの相手という特定の関係）、③会話する当事者同士は、少なくともその場では自分以外の人から規制されず自由に発話することができ、発話する権利について同等、対等であるという意味で対称的関係にある、④なされる会話は特定の時間、場所で開始され、一定の時間継続されて、特定の時間、場所で終了する、という4点である。各特徴を敷衍すれば、①言語を用いた情報伝達・相互行為、②当事者の特定性、固有性、③当事者の対等性、対称性、④会話の時間的一回性、場所的現場性、と言い換えられよう。

次に、会話で話された言葉の意味内容に焦点を当てるならば、一連の会話から私の言葉だけ、相手の言葉だけというように、会話の一方だけあるいは一部だけを抜き出すと、その言葉自体は何がしかの意味を依然保持し続けるが、抜き出された言葉は会話の連鎖の中にあった言葉の意味とは少なからず別物となってしまう。会話では私と相手の言葉のやりとりや連鎖それ自体の中で言葉の意味が生じ、その連鎖に応じて変化すると言わざるを得ないがゆえに、⑤会話内の言葉の意味とは、その前後や一連の会話のすべての言葉との照応関係の中で生じ、その関係により変化する。またそこから、⑥会話の内容は、単独の一語や一文だけでは表しえない、会話で話された内容とは、私の言葉と相手の言葉の連鎖それ自体であり、その総体、全体である。加えて、⑦会話が時間的に一回的、場所的に現場的な性格を有する点から、話された言葉自体としても、その意味内容としても、会話はそれをもう一度繰り返すこと、反復、再演することは不可能である。これらの特徴は、⑤会話内の言葉の相互照応性、意味の文脈依存性、⑥会話の一体性、分割不可能性、⑦会話の反復不可能性、と敷衍できるだろう。

会話とは、当事者同士が自分という名前のもとで行う一回限りの言葉の相互交換行為であり、そこでは私は私として、相手も相手その人として権利上、対等な立場から発話することができる。だが話された言葉という側面からみると、会話での言葉の意味、会話の内容は、私／相手という区別が不可能な、私の言葉は相手の言葉との関係と連鎖の中でしか意味をなさない照応関係にあって、会話とは会話中の言葉の連鎖ひとつながり、その全体である、としかいえないものである。

以上の考察に関して、会話の行為的側面については納得できたとしても、会話における言葉の意味については、なお疑問が残るかもしれない。私は私が思惟し想起するある意味内

容を言葉にし話すのであって、私の思惟は会話相手の思惟ではなく、それと明確に区別することができる。したがって私の思惟を言語化した私の言葉は、私の主張、私の思惟を意味する言葉であり、相手の言葉とは別物である。会話において私の発話内容は、私の言葉として明確に取り出しうるはずではないか、と。

この反論は正当であるように見える。だがここには、言葉と思惟に関する或る前提が潜んでいる。反論の正当性を計るには、その前提の正当性を考察しなければならない。その前提とは、私の思惟は私の言葉に先行してどのようにか存在し、思惟と言葉とは明確に区別可能で、両者は相互に不可侵の外在的関係を保つ、という前提である。具体的会話の場面で言えば次のようになるだろう。私は頭に浮かんだある思惟を言葉という記号に置き換え、それを音声として発する。それを聴いた相手は、その記号を彼の頭の中で再び概念・意味に置き換えて理解する。同様に相手も自分の思惟を言葉という記号に載せて発話し、私はその記号から相手の概念・意味を理解する。そうしたやり取りが、会話なのだ、と。言葉は単に概念・意味を運搬する手段・道具であり、思惟された概念・意味は言葉の記号としての意味内容と一対一で対応し、思惟は言葉に先立って言葉からの影響なしに存在する、という前提が、ここにある。

だが、言葉に先立って言葉から影響なく存在する思惟とは、どのようなものであろうか。言葉によらず、言葉以外の思惟のみで成り立つ思惟とは。我々が話そうとするとき、その出発点や話す動機となる何らか瞬間的な点火というような思惟がありえたとしても、これから話そうとする思惟が、思惟として完全な形で形成されているということはありえない。我々は言葉でしか考えられないのであって、言葉にすることによって初めて、その思惟が我々の思惟になるはずである。対話における言語の現象を詳細に記述したメルロ＝ポンティに従えば、「発言者は語る前に思惟するものではないし、それどころか、語っているあいだにも思惟しはしない。すなわち、彼の言葉が彼の思惟なのだ。同様に聴く側の方も、言葉の標識に関してあれこれ思惟を抱くのではない。（中略）語が我々の精神の全幅を領しているのであり、（中略）意味は至るところに現前していると同時に、またそれ自体としてはどこにも措定されていなかったのだ。」（PP 209-210）

我々が会話においてやり取りしているのは、言葉とは無縁な我々の思惟ではなく、むしろ言葉そのものであって、会話から一歩退いて会話内容についての思惟し、会話内容を対象化し内容として措定することがありえたとしても、それは再び言葉によってなされる以外にない。会話は言葉と言葉の直接のやり取りであって、交換される言葉は一つの連鎖をなし

て、二者間に、どちらの思惟か簡単には判別し得ないような会話された思惟、一つの会話の意味内容を織りあげていく。再びメルロ＝ポンティを引くならば、「本当の対話というものは、自分でも知らなかったし、自分だけでは考えることもできなかったような考えを思いつかせてくれるもの」（VI 29）であるし、「自分が言いまた他人が答えてくれたことによって導かれ、もはや自分だけがその思考者ではないような自分の思考によって導かれるのだ。」（VI 157）したがって、先の反論に対しては、その前提となっている言語観を我々は認めることができない。以上のように会話の行為と意味の二側面から7つの性質を確認し、本論をスタートさせよう。

二　インタビューと会話

では、我々が主題としようとするインタビューとはどのようなものであるか。インタビューも会話の一種であると先に述べたが、まずこの点から出発する。

二者間でなされる言葉の発話のやり取り、発話行為の連鎖という、先にみた本論での会話の定義に、インタビューは反するものではない。インタビューでの聞く側（インタビュアー）と答える側（インタビュイー）は、言葉で発話し意味のある言葉で語り合う。インタビューもそうした言葉のやり取りの連鎖である。この点でインタビューも会話の一種とみなし得るし、それゆえ会話で区別したのと同様、インタビューも行為としての側面と、話される言葉の意味の側面という二面から考えることができるだろう。

会話における行為的特徴としては、先に①言葉を用いた情報伝達・相互行為、②当事者の特定性、固有性、③当事者の対等性、対称性、④会話の時間的一回性、場所的現場性、の4つを挙げた。これらの特徴はインタビューでも当てはまるのかどうか。インタビューの行為的側面を、まず見よう。

インタビューにおいても、上記の①、②、④は妥当しそうだといえる。インタビューも言葉を用いた会話であり、二者は語り合うのであるから、①言葉を用いた情報伝達・相互行為であろうし、インタビュアーとしての私とインタビュイーとしての誰それという形で当事者が特定されて行われるものでもあるから、②当事者は特定性、固有性を有する。またインタビューも対面して特定の現場で行われ、言葉のやり取りとしてその時一回限りのものであるから、④会話の時間的一回性、場所的現場性がある。[3]

残ったのは、③当事者の対等性、対称性についてであるが、この点に会話とインタビューとの差異が現れていると思われる。インタビューが行われる現場を想起してみよう。

インタビュアーとして私は、インタビュー相手と特定の時

間／場所に落ち合い、対面して相手とのインタビューを始めるのだが、そのとき私と相手は、独特の立場と関係の変遷を時間とともに経験することになる。どういうことかといえば、まず落ち合ってインタビューが開始される前までは、二者は普通の会話者同士として対等な立場で会話していることが多い。だがいったんインタビューが始まると、その開始と同時に二者の一方が聞く側、質問する側に、一方が答える側に立場が固定されて、この関係はインタビューが終了するまで続く。インタビュー中にインタビュアーが質問から離れて、自分の経験など交えて雑談風に相手と会話することもあるが、それは自らが行う次の質問への準備や布石といった性格が強く、その会話（インタビュー内会話）中も私がインタビュアーで相手がインタビュイーである関係は保持されている。ところがやがてインタビューが終了すると、今度はそれと同時に両者の固定的関係も解除されて、二人はインタビュー以前の自然な会話者の関係に戻るのである。

前項で確認した通り、会話では、会話する二者は自由に発言することができるのだった。私は相手に質問したいときは質問し、相手の意見に同意するときは同意し、さらに相手の意見から想起される自分の経験や意見を語ったりする。また、相手の意見に同意できないときは反論し否定もする。会話においてそうした二者の言葉の交換は、それを繰り返していくうちに会話すること自体の楽しみ、言葉の〝交歓〟にもなりえ、やがて自分の言葉と相手の言葉が一つのテクスチャーとして、織物のようにして織り上がっていく感覚を感じることがある。メルロ＝ポンティは、この事態を上手く記述していた。

「私が他者に語りかけ、他者が語りかけるのを聴くとき、私が聴きとることは、私が言っていることの合間に入り込んでくるし、私の言葉は他者の言葉によって側面から切り直され、私は他者のうちでおのれが語るのを聴き、他者が私のうちで語るようになるのだ。」(PM 197)

会話では、私も相手も、問いかける人であると同時に問いかけに答える人でもあり得た（当事者の対等性、対称性）。だがインタビューでは、会話において感じられるそのような言葉の交歓は抑制され、さらに言えば禁じられているようにさえ見える。インタビュアーである私は、相手との雑談や何がしかの会話をただ単に楽しむためだけにその場にやって来たと言うことはできない。私はインタビュアーである限り、相手に何らかの質問を発し問いかけ、その返答を得るために、あるいは質問に答える相手の言葉を聴くためにここに来たというべきだろうし、インタビューでは、会話を楽しむ人ではなく、たとえそれが会話の楽しみを殺ぐことになっても、ひたすら問いかけ続ける人となるのである。この点に、会話と

インタビューの違いがまずは現れているように思われる。インタビューの場でインタビュアーが行うのは、相手に質問し問いかけ、その返答を聴き、再び問いかけるという繰り返しであり、それだけだとさえ言える。会話においては会話する二人は対等な立場で語り合うことのできる対称的関係であったが、インタビューではそうではなく、インタビュアーは常に質問し聞く側、質問に答える相手を聴く側で、インタビュイーはつねに質問に答える側、である、という非対称の関係が特徴である。

三　問いかけ＝裂け目

だが、インタビュアーが問いかけ、聞／聴くのは当たり前のことだ、と感じられるかもしれない。インタビューにはそれを行う何がしかの目的があり、多くの場合その目的は、インタビュイーが持つ知識や情報を引き出すことにあるのだから、インタビュアーはその情報を得るために自ずと問いかけるという態度になるはずだし、その情報を聞／聴こうとするだろう。他方、会話の方は、会話者双方に会話の目的といったものが意識されることは少なく、会話は自然発生的になされることが多いので、言葉のやり取り自体や会話の楽しさ自体に目が向かうのだ、と。

この反論は、確かに正しいであろう。インタビュアーは、そのインタビューの目的、質問の意図、その方向性を予め考え、それを質問リストという形に書き出してインタビューに臨むことが多い。自分の質問によって相手からの返答も様々に変化するし、うまく問いかけなければ、相手から聞き出したい情報を満足に得ることはできないだろう。相手から何かを聞き出したいならば、問いかけるという行為は必須である。

だがインタビューの目的を論ずることは、インタビューの行為的側面を出て、インタビューの意図、そこで話される言葉の意味内容に関する問題に踏み込んでいることになる。インタビューにおける行為の問題として、インタビュアーがひたすら問いかけ続けることに関する直接の疑問とは言えない。とはいえ、インタビュアーが問いかけ続ける理由を行為の側面からのみ考察することにも、限界があるだろう（インタビュアーの問いかけ続けるという行為を、その行為自体から理由づけることは困難である）。我々はここでどうしても、インタビューでの言葉の意味内容の側面に視点を移して、インタビュアーがなぜ問いかけるのか、その理由を継続して考えねばならない。

そこで再び前項での、会話で発話される言葉の意味の側面の特徴を思い出してみる。特徴としては、⑤会話内の言葉の相互照応性、意味の文脈依存性、⑥会話の一体性、分割不可

能性、⑦会話の反復不可能性、の3つがあった。インタビューも会話の一種であるならば、これらの特徴を保持しているだろうか。

確かにインタビューもこれらの特徴を有しているように思われる。私の問いかけと相手の答えの連鎖は、インタビューの中で⑤言葉の相互照応性、意味の文脈依存性を形成するだろうし、その連鎖は一つながりとなって⑥分割不可能の一体性を持つであろう。またインタビューのやりとりをそのまま二度以上繰り返すということもあり得ないから、⑦反復不可能性がある、ともいえる。

だがインタビューには、これら3つの特徴各々に抗するような形で働く逆向きの力が存在している、とも言えるのである。インタビューではしばしば、相手が話す言葉や内容の意味を確認するということが起こる。「あなたがおっしゃった○○とは、どういう意味ですか」、「あなたはその経験をしたとき、どう感じましたか」、「あなたが言う○○とは、どういうことですか」などなど。これらは、会話という一連の言葉の連鎖の中で、言葉の相互照応性、意味の文脈依存性、会話の一体性、分割不可能性、反復不可能性が作動しているその中で、それらの力に抗して、そこに意味の確認作業を、言葉と意味の対象化を、分割不可能なユニットに分割線と裂け目を、反復不可能性の中に言葉の絶えざる再定義という反復を持ち込もうとする力である。そしてそれらの対抗力のすべては、インタビュアーの「～ですか」という問いかけに、質問という形式にかかっているのであり、そこに端的に現れている。

インタビュアーがインタビュアーである限り問いかけ続ける理由について、彼がインタビュイーから得たいと考える情報を聞き出すために問うのだという第一の説明に加えて（この説明を我々は否定しない）、会話という連鎖が持つ言葉の相互照応性、一体性といった特徴が表す、会話の一体化に向かう力に抗して、会話の中に問いによる意味の再定義と裂け目を差し挟むために問うのだ、という第二の説明をここで指摘することができる。

四　問いかけと非対称性

インタビュアーが行う問いかけについて、その意味をさらに掘り下げて考えてみよう。再び実際のインタビューの場面に立ち戻ってみる。ここでわれわれに示唆を与えてくれるのが、インタビュアーが事前に作成してインタビューに臨むことの多い質問リストというものの存在である。質問リストとは、インタビューで相手に聞こうとする質問事項をノートに書き出したリストのことで、思いついた質問をアットランダ

ムに列挙してあることもあれば、相手とのやり取りを予想し話の流れや起承転結を考えて、質問の内容とその順序にも気を配って作られることもある。いずれにしても質問リスト作成に際しては、事前準備として相手の経歴を調べたり、相手の文章や作品に触れ、あるいは彼／彼女に関する批評を読んだりと、私の側での相手の人物像やイメージの形成と、何がしかの相手への評価、意味付け、つまり相手についての理解が、その前提にある。

実際のインタビューで相手と対面して座った私は、用意した質問リストを切り出そうとする。ところがこのとき現実の相手がその場にいるというだけで、質問リストに並ぶ自分の質問をそのまま問うことに、私は戸惑いを感じてしまうのだ。面前にいる相手の存在、その切迫感に私は戸惑う。それは、目の前にいる相手が事前情報から私が構成したイメージと何か違うという感覚、私のイメージ化や意味付けと無関係にずっと以前から存在し、現実の生身の彼／彼女として決して私には馴致されず、私のイメージを常に超越し、私が理解し尽せることはないという感覚の切迫といえるかもしれない。そのとき、私の側の相手への意味付けや理解と、その理解をつねに越える生身の相手の把捉できなさのせめぎ合いが、私の質問リスト上に端的に現れるのである。面前の相手は、私の理解、私の質問リストから常に逃れ去る存在だ。そのような相手に、私はどのように質問を投げかければいいのか。私の戸惑いとは、この点、つまり現実の相手の切迫から来る。

だがこれは、だから質問リストは不要だという結論を導くものではない。質問リストは、依然としてインタビュアーには必要なのである。というのも、私の理解をつねに越え出る存在である相手に対するにしても、私は私の理解を足場にしなければ何も発言できないし、さらに、自分の理解が妥当するか否かわからぬ時に相手に対面し、相手の面前で相手について語るとき、私は問いかけるという仕方でしか、相手に対して言葉を発することはできないからである。質問リストは、この意味で両義的な意味を持っている。それは、私の相手に対する或る理解を前提にしているという意味では、彼／彼女に対する私の理解を示すものである。だが他方で、その理解は質問という形で、疑問文で語られるしかないがゆえに、私の理解は問いかける相手の言葉、返答なしには空白のままに留まる、そのような理解であり（アンケート用紙の回答欄の空白部分のように）、質問リストは、同時に私の理解が空白でもあることを示すものでもある。[4] 私は私の理解が理解の空白でもあることを、生身の相手に対座した時にはたと気付かされ、そこでインタビューを始めることの戸惑いを感じるのだ。理解の空白とは、私が質問、問いかけという形でしか私の理解を相手に対して表明できないということであり、私の

理解が同時に理解の空白であることを端的に示しているのが、私の質問、問うという仕方での発話形態であり、その集積である質問リストなのである。

この考察から、インタビューアーがインタビューで行うのは、ただ質問すること、問うことだけであるという意味も、より深く納得できる。インタビュアーが質問するのは、その質問によって相手から何かの情報を聞き出したいからだという、前項で挙げた第一の説明に関して言えば、今問おうとするこの質問が確実に私の意図する情報を相手から引き出すかどうかは、実際に相手に質問してみなければわからないのがインタビューであり、これを聞けばこの答えが返ってくるはず、この情報が得られるはずと予想するインタビュアーの思惑を常に越え出るのが、対面している現実の相手なのである。つまりインタビューでは、或る情報を得るためにそれに対応した質問をするというより、或る情報を得ようとして聞くこの質問自体が有効なのか、さらには、その質問の背後にある、この質問によって特定の情報が得られるだろうと考えた私の視点、私の理解が有効なのかということまで含めて、私は相手に質問し、問い合わせている。質問することで、私の質問が相手から引き出し私にもたらすものを、私は、当の相手自身に問い合わせている、聞いているのだ、という方が正確であろう。私は、私の質問の意味自体を相手に確かめ相手に問い合わせるために聞くとも言えるし、質問に対する相手の返答によって初めて、私がした当の質問の意味を知るということにもなるだろう。

さらに、第一の説明に続いて挙げた、会話の一体化の方向性に抗する力としての、再定義、裂け目としての問うこと、という第二の説明について考えてみる。我々はこの点が会話とインタビューを分かつポイントと見なしたわけだが、相手が話す言葉やその意味内容を確認するために問うこと、相手に「あなたがおっしゃった〇〇とは、どういう意味ですか」、「あなたはその経験をしたとき、どう感じましたか」と質問に質問を上書きするように重ねて聞くことは、右に述べた自分の質問の意味を相手に問い合わせるために聞くのとは反対の、相手の言葉の意味を相手に問い合わせるために聞く、そういう問いだ、ということになるであろう。ここにもやはり、私の理解とそれを越え出る生身の相手の存在、その存在に対する私の戸惑いが根底にある。相手の語った言葉を私は意味として理解するわけだが、相手はつねに私の理解から越え出る存在であり、その相手から発せられる言葉を理解するには、私はただ相手が語る言葉の意味を繰り返し聞き直すより他にない。理解の拠り所は、すべて相手の言葉、相手の側にあるのであって、私は相手の言葉を理解するために相手に対して「〇〇とは、どういう意味ですか」「どう感じましたか」と、

問い続けるしかないのだ。そのようなインタビュアーの絶えず質問するという行為は、インタビューで取り交わされる言葉の意味を、絶えず再定義することになり、会話言語の一体化に向かう力に抗して、言葉の意味の取り上げ直しを繰り返し、会話言語内に裂け目として意味の文節線を引き直し続けることになるわけだ。

かくして、インタビュアーである私は、相手の理解し尽くせなさの切迫と戸惑いに取り憑かれるのを発端として、自分の質問の意味を相手に問い合わせるにしろ、相手の言葉の意味を相手に問い合わせるにしろ、理解し尽くせなさ、理解の空白ゆえに、相手に対してインタビューの間中、問いかけ、質問をし続ける。私は常に問いかける側にあって問いかけ続ける人であり、相手はその問いかけに答える側としてあり続ける。聞く側／答える側が入れ替わることはなく、立場の交換はあり得ない。こうして二者の関係は、インタビューの間ではつねに必ず非対称の関係となるのである。

五　二人の他者と隔時性

前項まで、我々はインタビューという場面に定位し、そこで起こっていることに即する形で考察を進めてきた。見られたように、インタビュアーが不可避的に質問し問いを発し続ける人となること、そしてそれがインタビューにおける二者関係（インタビュアーとインタビュイー）を会話（＝対称的関係）とは異なる非対称的関係に置くこと、さらに、これらインタビューに特徴的な事柄の根底には、インタビュアーがインタビューを開始するときに感じる切迫感と戸惑いがあることを、我々は確認した。だがこの戸惑いとは一体何なのか。以下の項で、このことを見定めることにする。

我々はこの問いを問うために、本項からレヴィナスの思想を参照軸としながら考察を進めていくことにしたい。というのも、以下に見るように、レヴィナスは自らの思想の核心を私と他人との対面関係の中に置いた人だからである。

まず、インタビュアーである私が戸惑いを感じた場面にもう一度戻ってみる。私はインタビューに先立って相手を自分の中で想定し理解し、そうしてイメージされた相手を基に質問リストを用意してインタビューに臨んだ。しかし、実際に現実の生身の相手と対座すると、相手は私の理解から逃れ去り、私の理解を絶えず越えて行く存在として私には感じられる。そのようなときに、これから質問リストを参照しつつ質問を発しようとする私は、相手が切迫してくる感覚を覚える。そこに私の戸惑いは発していたのだった。

「措定された項と化した他者（autrui comme thème）に向けられる言葉は他者を内包するかにみえる。しかし、

そのときすでに、言葉の宛先たる他者は、彼が対話者である限りにおいて、自分を包摂していた措定された項から離れてしまっている。それゆえ他者は、語られたことの背後から出来せざるを得ない。」(TI 212)

私は、インタビューを開始するために質問を発しなければならないが、そのとき質問が最終的に行き着く先、質問の最終的なテーマは、目の前にいる他者(=インタビュイー)自身であるといえる。私が相手に対して用意した質問リスト上には様々な質問が書かれている――「お生まれはどちらですか?」、「ご家族は何人?」、「子供の頃の印象深い記憶は?」、「あなたの愛読書は?」、「あなたの作品の生まれた経緯は?」、「過去の体験を振り返って感じることは?」、「将来のご予定は?」など。だが、それら質問の根底に共通してある問いは、一言で言えば「あなたは誰ですか?」「あなたは何者ですか?」という問いであろう。この第一の質問の言い換え、バリエーションとして、右に挙げた様々な質問はある。そのバリエーションを得るために、相手に関する資料を調べ、相手をイメージとして想定する必要が、私にはあったとも言える。

だがさらに、その第一の問いが、私が考え、その考えのうちに発する質問である限り、第一の質問「あなたは誰ですか?」には、もう一つその奥に、さらなる前提があることにも、我々は気付かねばならない。「私はあなたを○○と考えます、私にはあなたは○○と見えますが、そのあなたとは誰ですか?」と。「あなたは誰ですか?」という質問、一文を単純に、ただ機械的に繰り返すのでなく、相手に実際に質問し、相手から内実のある答えを得るためには、「あなたは誰ですか?」には言い換え、バリエーションが必要である。インタビュアーは特に意識せず普段から自然にそれを行なっている。だが、そのバリエーションを得るには、最小の範囲としても、あなた=○○である、という相手の同定が必要である。第一の質問のさらなる前提とは、インタビュアーが想定し理解する「私はあなたを○○と考えますが…」という前提である。「あなたは誰ですか?」の問いには、逆説的にも「あなたは○○である」という私の想定、理解という前提がある(→第四項「理解」と「理解の空白」)。

この「私はあなたを○○と考えます」、あなた=○○の同定は、明示されるわけではない。ただインタビューでなされる具体的質問の背後に想定されているだけである。あるいは、一つ一つの質問の持つ問いのテーマが示しているものがその同定に当たる、と言えるかもしれない。「あなたの愛読書は?」という具体的質問のテーマに暗に想定されている、あなた=本を読む人、本から影響を受けただろう人、本とともに考えてきただろう人などといった同定と、それが示す「本という切り口から見たあなた」というテーマである。

この質問を受けて相手が答える限りでは、相手も「本という切り口における自分」というテーマに内包されている。だがそこからスタートした相手の言葉は、本と自分を巡って私の想定とは関係なしに様々に飛び立っていく。その答えには「聖書」もあれば「マンガ雑誌」もあろうし「本は読まない、映画の方が好き」もあり得るだろう。その答えのどれもが、その言葉が言われた瞬間に、私に相手の新しいイメージを喚起させるのだ。彼／彼女が私の質問に答えるごとに、前に述べた言い方に従えば、私の理解と私の理解の空白に相手が新しい言葉をもたらすたびごとに、そこに新たな彼／彼女が現れる。レヴィナスの言葉を借りれば「他者は、語られたことの背後から出来せざるを得ない」のだ。

「言説においては、私に措定された項としての他者(Autrui comme mon thème)と、対話者としての他者(Autrui comme mon interlocuteur)との隔たりが不可避的に浮き彫りにされる。というのも、対話者としての他者は彼を一瞬捉えたかにみえた措定された項から解き放たれるからであり、それゆえ、私が対話者に付与した意味はこの隔たりによってたちまちのうちにその正当性を疑われることになる。」(TI 212-213)

つまりインタビュアーの私は、インタビューの間中、つねに二人の他者に触れていることになる。あるいは、インタビュー前を含めれば三人の他者ということにもなろう。すなわち、インタビュー前に私がインタビュイーとして理解し想定したイメージとしての他者と、インタビューするために実際に会い対面しているが私には依然イメージ化された他者の延長でしかないような、私が具体的質問を投げかける以前の他者（この二人の他者は「措定された項としての他者」）、そして私のその質問に答える他者（＝「対話者としての他者」）の三人である。私が質問を発することによって、「措定された項としての他者」と「対話者としての他者」との間の不可避的な隔たりが浮き彫りになる。私にとっては、質問以前の他者と質問以後の他者は、別の他者なのである。インタビュアーの私はインタビューの間、その二人の他者に触れ、その「隔たり」のただ中に居続ける。と同時に、その隔たりの中にいるからこそ、「対話者としての他者」が私が理解し捉えたかに見えた「措定された項としての他者」からつねに隔たり逃れるがゆえに、私は新たに「対話者としての他者」へと質問を投げかけないわけにはいかないのだ。私のその質問は、再び新たな「措定された項としての他者」と「対話者としての他者」の隔たりを生み、この関係はインタビューの間中、続いていく。これを裏面から言えば、次のようにもなろう。私はつねに「対話者としての他者」を捉えることはできず、「対話者としての他者」はつねに私を逃れ去るが、しかし、

その「対話者としての他者」を出現せしめるのは私の質問であり、私の問うという行為である。私が質問しなければ、他者は「措定された項としての他者」のまま留まる。その他者は、私の理解しうる他者である。私が問うことを止めたとき、それはインタビューの終わりを意味するだろう。インタビューを続ける限り、私は「対話者としての他者」に触れる可能性を持つ。

「対話者としての他者」とは、レヴィナスのより知られた用語で言えば「顔（visage）」である。

「私の内なる〈他人〉の観念をはみ出しつつ〈他人〉が現前する仕方、この仕方を我々はここで顔と称する。（中略）〈他者〉の顔は、観念する私および観念されたものと釣り合った観念、つまりは十全なる観念を不断に解体し、十全なる観念を凌駕する。」（TI 43）

「私の内なる〈他人〉の観念」とは「措定された項としての他者」と同義であろう。「顔」はそこから不断に隔たり、はみだす。私に「措定された項としての」観念された他者を不断に解体しながら現れるのは、「対話者としての他者」である。「対話者としての他者」は、「顔」という仕方で我々に「現前する」。だがその「対話者としての他者」も、いったん現れて、私に「対話者のしての他者」という観念として包摂されたとき、それは再び「措定された項としての他者」となっているはずだ。では、「措定された項としての他者」と「対話者としての他者」の区別は、どのように私に可能なのか。この疑問は、当然生ずるはずの疑問である。しかしインタビューでは、その答えは明白である。それは私が問うこと、質問することそのことの中にある。

インタビュアーの私は、「措定された項としての他者」と「対話者としての他者」の隔たりのただ中にいて、質問を発する。「対話者としての他者」は、私の質問の、「語られたことの背後から出来せざるを得ない」のであった。そして私の質問とは、私の理解を前提にしつつも、同時に疑問文で語られるという意味で、私の理解の空白を示してもいた。私の質問とは、私の理解であり同時に私の理解の空白であった。私の質問は「措定された項としての他者」の理解を前提に、「措定された項としての他者」へと投げかけられる。だが、その質問に実際にそこで、対面の場所で、現に私の前にいて答えているのは「対話者としての他者」である。「対話者としての他者」がそこで答えるのは、私が質問という形式で、疑問文で問うからであり、その質問が私の理解であると同時に、私の理解の空白だからである。「対話者としての他者」は、私の理解の空白に赴く。その意味で「対話者としての他者」は、私の前に現に対座している、現前している。しかしそれは、私の質問に答えている限りにおいてであり、私の質

問の後という時間において、である。彼／彼女の答えを受けて私が再び相手に質問をし始める時、私の質問の前という時間にいる彼／彼女は、再び「措定された項としての他者」になっている。つまり、私が質問し問いかける相手はつねに「措定された項としての他者」であって、「対話者としての他者」ではない。私は「対話者としての他者」と同じ現在という時間に居合わせることはできないのだ。「対話者としての他者」に話しかけ、問いかけようとするとき、問いかけた相手、質問した相手はつねにすでに「措定された項としての他者」となっている。それは言い換えれば「対話者としての他者」の痕跡[5]である。質問する私は「対話者としての他者」からつねにすでに遅れざるを得ない。ここにレヴィナスの言う、顔の現出の「隔時的筋立て」がある。

「現出（la manifestation）は不連続的なものとして問いから応答へと持続していく。こうして、私たちは『見ているところの誰』の正体を見破るよう促される。この『誰』は自同的主体としての存在の開けのうちに定位されていると考えられているが、実は、〈同〉と〈他〉の隔時的筋立ての結節点（une intrigue dia-chronique）なのだ。（中略）プラトンは、問いと応答との無言の往還として思考を考えた。だがこの無言の往還は、〈同〉に命令する〈他〉によって、主体性の結び目が結ばれるような隔時的筋立てにすでにして準拠している。」（AQE 46）

主体性の問題は、この後の項で見ることにする。「対話者としての他者」＝「顔」は、問いから応答へという持続の中で現出する。インタビュアーの私は、「『見ているところの誰』の正体を見破るよう促されて」質問を発するが、私と同じ時間を生きる「誰」は、私の理解可能な自同的主体としての存在であって、それは「措定された項」となった他者である。私が相手である他者について、「問いと応答との無言の往還として思考」する限りにおいては、私は「措定された項としての他者」について考えているだけであって、「対話者としての他者」に対しているのではない。

「顔は内容となることを拒むことで現前する。この意味において、顔は了解し内包することのできないものである。顔は見られもしなければ触れられもしない。なぜなら、視覚や触覚においては、自我の自同性が対象の他性を包含し、その結果、この対象はほかでもない内容と化すからである。」（TI 211）

先に我々は、インタビューで私がした質問に答える相手、実際にそこで、対面の場所で、現に私の前にいるのは、「対話者としての他者」であると書いた。だが、レヴィナスの右の記述を見た後では、インタビューにおける「対話者として

の他者」について、より正確には次のように考えなければならないだろう。つまり、「対話者としての他者」は、対面の場所に、現に私の前にいるのだが、それは彼／彼女が私に見えているからではない。彼／彼女がそこにいるのは、私の「内容となることを拒む」限りにおいて、つまり私に理解可能な他者、「措定された項としての他者」となることを拒む限りにおいて、である。では、「対話者としての他者」はどのように現出するのか。「措定された項としての他者」であることを拒むことによって、それはつまり、私の質問に答えることによって、ということだろう。私の質問、すなわち私の理解を前提にしているが――その意味で私の「内容」であり――同時に、他者がそこに赴く空白でもある疑問文という形式の私の質問に、私の「内容となること」を拒みつつ逃れさりながら赴き、それに答える限りにおいて、である。私の視覚に、あるいは触覚に現れるのではなく、ただ私の質問に答えるという限りで現出するもの、それが「対話者としての他者」であり、「顔」である。

これを敷衍すれば、インタビューの場所とは「顔」が現出する場所であり、私が「対話者としての他者」＝「顔」に現に対面する場所であることになる。だがその対面とは、私と顔の同じ現在という時間の上での対面ではない。私と顔は、つねに「隔時的」関係にある。その意味で、私と顔は対称関係にはない、非対称的関係であるほかはない。私が質問を投げかける他者と、その質問に答える他者は、別の他者である。質問する私は、顔の現出につねに遅れて立ち会うしかなく、顔はつねにすでに私にとって痕跡である。かくして、インタビューの場所とは、私と他者との「隔時的筋立ての結節点」であるのだ。[6]

六　主体性＝受動性

前項で考察を先送りにした主体性について、ここで取り上げよう。「隔時的筋立ての結節点」は主体性に関係していた。繰り返しになるが、先の引用文にもう一度立ち返ってみる。

「現出は不連続的なものとして問いから応答へと持続していく。こうして、私たちは『見ているところの誰』の正体を見破るよう促される。この『誰』は自同的主体としての存在の開けのうちに定位されていると考えられているが、実は、〈同〉と〈他〉の隔時的筋立ての結節点なのだ。（中略）プラトンは、問いと応答との無言の往還として思考を考えた。だがこの無言の往還は、〈同〉に命令する〈他〉によって、主体性の結び目が結ばれるような隔時的筋立てにすでにして準拠している。」（AQE 46）

主体性は、「隔時的筋立て」において、「〈同〉に命令する

〈他〉によって」「結ばれる」。これはどういうことだろうか。

インタビューで質問リストとして用意した質問を相手に問いかけようとする時、私は相手の切迫を感じ、質問を発することに戸惑いを覚えたのだった。前項でインタビューというものの「隔時的筋立て」を確認した我々は、今、この戸惑いにある程度の説明を加えることができる。私が質問を用意すること、それは私が相手を「内容」として理解し「措定された項」に置くことを前提とする。そうして用意した質問を発しようとする時に、私の目の前にいる他者は、私にとって「見えているところの誰」であり、「自同的主体」であるはずである。私が理解した「措定された項としての他者」と「見えているところの誰」である「自同的主体」の間には、少しの隔たりもない。だがいったん私が質問を発し始めると、面前の他者は「対話者としての他者」として「措定された項」となることを拒み、そこからつねに隔たり、私の質問から逃れ去る。その時、私の質問はいったい誰に対して発せられていると考えるべきか。私は「措定された項」から逃れ去った他者を顔の痕跡として感じるとともに、私の質問がつねに相手に遅れていて、私の発する質問は相手と同じ現在という時間にはない、「隔時的」と言われる別の時間の中でこだましている、ということを感受し、戸惑いを覚えるのである。インタビューが「隔時的筋立ての結節点」であるということは、私にとってみれば、私の質問はつねに時期外れで、相手に遅れており、誰に対して、何を＝どのような内容を聞いているのか当の私にも判然としない、という事態を表す。私が相手を感受し、そこで感じた戸惑いとは、まさにインタビューの「隔時的筋立て」そのものに対する戸惑いだったとさえいえる。

戸惑いの「筋立て」がこのように考え直されると、戸惑いから発しそれと直接関連していた、インタビューで私はなぜ質問し続け問いかけ続けるのかの理由も、新たに捉え直すことができる。我々はこの問いについてすでに第四項で考察を行ったが、そこでの結論は、相手の理解し尽くせなさゆえに、私の質問の意味とそれに対する相手の答えの意味の両方を問い合わせるには、再度相手に聞くしかない、相手に問い合わせることでしか私の質問も相手の答えも、その意味が明らかとはならない、それゆえ私は質問し続けるのだ、というものであった。この考察は本項まで至った我々にとってみれば、一面では正しいが、他面では不正確な部分が残されている。不正確というのは、この考察では私による相手の理解という点を強調し、相手の理解し尽くせなさは私の相手への理解不足であり、その理解不足を補うために私は質問し、質問を繰り返すことで相手への理解をより深める、だから私は質問し続けるのだ、私は他者理解を目的として質問を繰り返すのだ、

と言い換えることが可能だからである。だがインタビューの「隔時的筋立て」を確認した今、理解不足とその補足のために私は問うのだ、という他者理解を目的とする筋立ては、もはや不可能である。この筋立てでは相手が「自同的主体」として「措定」されており、私は「『見ているところの誰』の正体を見破る」ために質問していることになろう。インタビューの「隔時的筋立て」では相手は「自同的主体」ではない。彼／彼女は「措定された項としての他者」であることを拒み「対話者としての他者」へと逃れ去り常に過ぎ去る者であり、「顔」であり顔の痕跡なのであった。そのような相手へと問いかける私の質問は、したがって、相手を理解するためではなく、相手を理解し尽くすことができないゆえになされる、という他はない。

インタビューの相手とは、私の他者理解を無限に超越していく者である。たとえ私が相手を理解することを目的としてインタビューを始めても、やがてそこで経験されるのは、他者理解を目的として問うている自分ではなく、むしろ他者理解の不可能に促されて、理解しようとするほど逃れ過ぎ去っていく隔時的な時間の中の相手に近づこうと、後を追いかけるように問い続けている自分であり、他者理解とはまったく逆の、反転した立場に立っている自分である。それはつまり、他者理解のためにという目的を持った能動的な自分ではなく、理解できないという不能力に発し、それに促されつつ他者の後を追うという、自分以外のものに触発されて受動的な立場から問い続けている自分である。

「主体性――自同性のかかる破産が生じる場所、否、非場所――は、いかなる受動性よりも受動的な受動性として生起するとともに過ぎ去る。思い出や歴史（物語）によっては再現、回収することのできない隔時的過去、言い換えるなら、現在と共約不能な過去に呼応しているのは、引き受けることのできない自己の受動性である。『生起する、過ぎ去る、自己を超える』を含意する《se passer》という表現は重宝な表現である。この表現を用いると、自己は『能動的総合』なき老いのように、自己を過ぎ越した過去のうちで描かれる。応答とは、責任――重くのしかかる負荷としての、隣人に対する責任――であって、かかる応答は、主体性の受動性のうちで、存在することからの離脱のうちで、感受性のうちで、こだまするのだ。」(AQE 30-31)

以前、我々はインタビュアーとしての私を、ひたすら問い続ける人と規定した（第二項）。だがこの規定は、ここにおいて逆転する。まず私がいて、その私がひたすら問いかけ続けるのではなく、ひたすら問いかけ続けることによって、私は私となるのである。私が問いかける時、他者はつねに「措

定された項としての他者」となっており、「対話者としての他者」はすでに過ぎ去った後である。これは、問いかける私は、問いかける以前にすでに「対話者としての他者」に触れられていることを示す。つまり私の問いかけとは能動的行為であるというよりも、私に触れて過ぎ去っていく「対話者としての他者」への呼応としてあるということになり、つねに「受動性」として発動している。問いかける私とは、常に現在という時間にいる「自同性」としての私ではなく、現在の私にとっては「共約不能な」「隔時的過去」に触れられた呼応として問いかける私であり、その意味で「主体性」とは「受動性」としてまずあることとなる。問いかけ続けることとは、つねにすでに過ぎ去る「対話者としての他者」への無限の呼応であり、他者への「応答」なのだ。

「主体性、それは〈同〉のなかの〈他〉である。とはいえ、この様相は対話者同士の相互現前の様相とも異なる。対話者同士の相互現前においては、対話者たちは仲むつまじく共存し、合意を形成する。これに対して、主体性の様相としての〈同〉のなかの〈他〉は、〈他〉によって不安をかき立てられた〈同〉の動揺（l'inquietude）である。」(AQE 46-47)

隔時的筋立てにおいて、主体性は受動性として「結ばれる」。言い換えれば、主体性とは、現在という時間において現在とは共約不能な過去に触れられた、現在と過去の「結節点」であり、私という「自同性」が他者への「応答」の「受動性」の中で「破産」する場所、「〈同〉のなかの〈他〉」なのである。ここまで考察が進んで、インタビュー開始時に私が感じた戸惑いというものについて、ようやく十全な説明が可能となる。本項最初でこの戸惑いの理由はインタビューの「隔時的筋立て」に向けられたが、そこからさらに詳細に、「隔時的筋立て」における「受動性」としての主体性、つねに過ぎ去る他者にすでに触れられており、遅ればせながら無限に「応答」するしかない「受動性」としての私が見届けられた。私が感じた戸惑いとは、つまり「〈他〉によって不安をかき立てられた〈同〉の動揺」であり、「受動性」として自同性が破産する場所＝私の、その「非場所」としての「動揺」なのである。

七　〈語ること〉

インタビューが「隔時的筋立て」によって動いており、そこで質問し問い続ける私の主体性が「受動性」として、つねにすでに過ぎ去っていく「対話者としての他者」への「応答」であるとしたら、インタビューでやり取りされるものとは何なのか、この問いが我々の前に浮上することは避けがた

い。インタビューでは他者理解も、「対話者同士」の「合意を形成する」ことも否定されているように見える。ではインタビューで話される言葉とは何か、それにどんな意味があるのか。我々は再び、インタビューで交される言葉について問い直さねばならないだろう。

私が発した言葉が届いている相手は誰かと考えてみると、それはさしあたり「対話者としての他者」ではないだろう。「対話者としての他者」は私が問いを発する時、つねにすでに過ぎ去っている。私の言葉が届く先は「措定された項としての他者」以外にない。「措定された項」となった他者、それはテーマとなり主題化された他者（Autrui comme mon thème）であり、私によって理解可能な他者である。そしてそこに向かう私の言葉も、或るテーマを持ち主題化された意味を持つ言葉、私の理解に基づく言葉である。レヴィナスは、このような言葉を「語られたこと（le Dit）」と呼ぶ。「語られたこと」とは、私の理解であるところの言明であり、世界や存在についての主題的な命題である。「存在が現出し、エオン（存在するもの）が実詞化されるところの〈語られたこと〉（後略）」（AQE 76）

だが、言葉はこの「語られたこと」にすべて回収されるものではない、とレヴィナスは考える。それが「語られたこと」から区別される「語ること（le Dire）」である。

「〈語ること〉、それは隣人に接近し、隣人に向けて『意味することの口を開く（bailler signifiance）』ことである。このような〈語ること〉は、説話として〈語られたこと〉のうちに刻印される『意味の給付（prestation de sens）』に尽きるものではない。本来的な意味での〈語ること〉は、どんな対象化よりも先に他人に対して口を開ける意味することであって、諸記号の給付（delivrance de signes）ではない。」（AQE 81）

「語られたこと」が「意味の給付」、「諸記号の給付」であるというのは、言葉が同時に言葉の意味として流通するレベル、つまり言葉がシニフィアンとシニフィエを有するレベルにおいて言表されることを意味するだろう。これに対して、「語ること」は「意味することの口を開くこと」、「どんな対象化よりも先に他人に対して口を開ける意味すること」であるという。あるいは別の箇所では、このようにも言われている。

「〈語ること〉は当の語ることを語る、語ることを主題化することなく、語ることをさらに曝露しつつ語る。」（AQE 223）

「回避不能な他人への曝露（exposition）たる〈語ること〉は、〈他者〉への徴しの贈与というその真摯さを通じて、私をどんな自同性からも切り離す（後略）」

(AQE 85)

「〈語ること〉はコミュニケーションである。ただし、〈語ること〉が一切のコミュニケーションの条件、曝露である限りでそうなのだ。」(AQE 82)

「自己を剝き出しにするというリスクのうちに、真摯さのうちに、内面性の決壊と一切の避難所の放棄のうちに、外傷への曝露のうちに、可傷性のうちに、コミュニケーションの開口は存している。」(AQE 82)

これらの記述を通じて、「語られたこと」が「措定された項としての他者」に関係するのに比して、「語ること」が「対話者としての他者」へと「語ること」を意味するのは明らかだろう。「語ること」は「意味」と「記号」の「給付」でも「主題化する」ことでもない。それは、私の「自同性」から離れて他者へ「自己を剝き出しにする」「曝露」であり、その「曝露」によってコミュニケーションが開かれる「どんな対象化よりも先に他人に対して口を開ける意味すること」である。インタビューの「隔時的筋立て」において、私はつねにすでに過ぎ去る「対話者としての他者」に過去において触れられていた。その接触に呼応して私が問いかける質問は、それが言葉であり意味を持つという点では「語られたこと」である。だが私の問いかけは、単に問いかけの内容＝「語られたこと」に限定されるものでもない。その問いかけが、現在と共約不能な過去に呼応し、私が完全には引き受けることのできない、「受動性」と「〈他〉によって不安をかき立てられた〈同〉の動揺」から発する他者への応答ならば、それは、私の「自同性」から離れて「自己を剝き出しにする」「曝露」たる「語ること」としての言葉でもあるだろう。その限りで、私の問いかけは、問いかけとしての意味内容であると同時に、私はあなたへ応答し続けるということを示す「徴し」であり、その「徴し」として自らを「贈与」する他者への「コミュニケーションの開口」なのだ。

「〈語ること〉の主体は記号ないし徴し (signe) を与えるのではない。そうではなく〈語ること〉の主体は自ら徴しと化し、他人への忠誠のうちに消え去る。」(AQE 83)

インタビューにおいてやり取りされる言葉の意味も、かくして明らかとなろう。それは「語られたこと」のレベルでは、シニフィアン／シニフィエとしての言葉であり、私に理解可能な記号と意味の給付であり、主題化であり、自同性としての言表、命題である。だがインタビューが「隔時的筋立て」を有するものである限り、そこでの言葉は「語られたこと」に尽きるものではない。私が質問し問いかけ続ける、言葉を発し続けるということは、同時に「語ること」として私が私という自同性から離れて、どんな言葉の意味よりも先に他者（「対話者としての他者」）に対してコミュニケーションを開

くということ、それをリスクを省みずに自ら徴しとして示すことを意味する。インタビューでの質問、問いかけとしての言葉は、その字義通りの質問の意味であると同時に、いやそれに先行して、私は他者とのコミュニケーションを開き維持するということを、つねにすでに過ぎ去るその「対話者としての他者」に対して徴すための呼応であり「応答」なのだ。

八　結論：〈近さ〉とインタビュー

本論の最後に、インタビューにおける私と他者との関係について考えよう。鍵となるのはレヴィナスの「近さ（proximité）」という概念である。「近さ」は次のように用いられる。

「〈語ること〉は一者と他人との近さであり、諸言語に先立つ言葉である。（中略）〈語ること〉という近さは接近するという誓い（engagement de l'approche）であり、他人のためにある一者（l'un pour l'autre）である。（中略）それが意味の意味すること（la signifiance de la signification）なのだ。」（AQE 17）

「近さは、（中略）それは融合ではない。近さは他者との接触（contact）である。接触すること、それは他者を包囲して他者の他性を廃棄することでも、他人のうちに自分を消失させることでもない。接触のただ中において、触れるものと触れられるものとは分離される。」（AQE 137）

「〈近さ〉とは差異――非合致であり、時間における不整脈であり、主題化に逆らう隔時性、（中略）まさに物語りえないものだ。」（AQE 258）

「一者と他人――私と隣人――の近さにおける差異は、無関心―ならざること（non-indifférence）に（中略）、ほかならぬ私の責任（ma responsabilité）に転じる。」（AQE 258）

「近さ」とは単純な物理的距離の問題ではない。それは、私が他者へ「語ること」と同じことであり、他者へ「接近するという誓い」、他者と「接触すること」である。だがそれは、他者との「融合」を意味するものではない、「他者の他性を廃棄すること」ではない。「近さ」は同時に「差異」であり「隔時性」であり、近さにおける差異が、私の他者への「無関心―ならざること」を開き、「私の責任」へと私を導く。

「近さ」というあり方は、まさに本論で考えたインタビュー―そのものに通じるあり方なのではあるまいか。インタビューは、最初は私と相手との対面という物理的な「近さ」から開始されるが、私が質問を繰り返すうちに、私はインタビューの「隔時的筋立て」の中に巻き込まれていく。インタビュ

ーは、会話との比較で見たように、言葉による他者との「融合」ではなく、むしろ他者との「差異」と「非合致」が明らかとなるような経験である。その「非合致」の根底には、「主題化に逆らう」他者と、他者と私との「隔時性」があった。他者とは私にとって「物語りえないもの」だ。他者は、私がそれと気付く以前に私に触れ、過ぎ去る。では一体、インタビューで私は何を語り得るのか。「非合致」と「隔時性」が際立つインタビューにおいて、私が示しうるのは、他者の他者性を「廃棄すること」なく他者に「接触」することであり、「物語えない」他者を「諸言語に先立つ言葉」で「語ること」である。それはまさに、私が他者に「接近するという誓い」であり、私が「他人のためにある一者」であること、他者に「無関心―ならざること」、他者への「私の責任」を、私に教える。私の言葉は、「語ること」において初めて、インタビューにおける意味内容（signification）から、「意味すること」、意味生成（signifiance）へと至るのだ。

インタビューとは「近さ」の経験である。それは、他者理解、つまり他者を内容として把握するためのものではなく、「他者の他性を廃棄」せずに「接触」する経験である。そこにおいて私は主体性＝受動性として、他者に触れられ、自同性の動揺を経験する。私がインタビューで相手に問いかける質問は、質問の意味としての「語られたこと」であると同時に、言語に先立つ言葉としての他者への呼応、「応答」であり、他者への「接近」の誓いである「語ること」、「コミュニケーションの開口」である。それゆえ私は、インタビューで他者に対して質問し続け、問いかけ続ける。それは私の「無関心―ならざること」の「徴し」である。インタビュアーはただ「他者のためにある一者」、つまりインタビューで対面して面前にいる相手に対して、私が応答する責任を持つただ一人の人物である、ということを、問いかけ続けることによって徴している。私の問いかけ、質問とは私の応答なのだ。問いかけ続ける限り、次のコミュニケーションが開かれる可能性が残される。かくして、インタビューは終らない。

注

※本論で引用する著作に関しては、次の略号を使用し、頁数を併記する。引用した日本語は翻訳書に従うが、文脈に応じて訳を変えた箇所もある。

Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945. (PP) 竹内芳郎／小木貞孝訳『知覚の現象学Ⅰ』みすず書房 1967

―, *La prose du monde*, Gallimard, 1969. (PM) 滝浦静雄／木田元訳『世界の散文』みすず書房 1979

―, *Le visible et l'invisible* Gallimard, 1964. (VI) 滝浦静雄／木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房 1989

Levinas, E., *Totalite et infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1961. (TI) 合田正人訳『全体性と無限』国

文社 1989
――, *Autrement qu'etre ou au-dela de l'essence*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974. (AQE) 合田正人訳『存在の彼方へ』講談社 1999

(1) 本論で言うインタビューとは、インタビュアー（聞く側）とインタビュイー（答える側）が実際に会って話をすることを指す。新聞／雑誌に掲載されるインタビュー記事（活字となったもの）とは区別する。

(2) 以下、本稿で「言葉」というとき、特に注記のない場合は「話された言葉」、「パロール parole」を指す。

(3) 一回限りではなく、複数回の連続インタビューといった編集記事が新聞／雑誌に掲載されることがあるが、実際に数回にわたって行われたインタビューでも各回が同一のものになることはないし、一連の言葉のやり取りとしてもまったく同じ受け答えが繰り返されるインタビューはあり得ない。連続インタビューという言い方は、多くは編集サイド＝記者やインタビュアーが設定した何らかの意味や概念、テーマのレベルで或る連続性を見ているわけだろう。さらに言えば、そうして設定された意味やテーマとは、会話の前に、あるいは終わった後に設定されるもので、会話が行われている最中の言葉のやり取りとは位相を異にしていると考えるべきである。

(4) 以下の箇所を参照に挙げる。「『何』という問いはそれが発見しようと望むものと相関関係にある。『何』という問いは、『何』という問いによって発見されるべきものにすでに依拠している。『何』という問いの探索はことごとく存在のうちで展開される。（中略）『何』という問いは、存在論として、存在を了解しようと努めると同時に、ほかならぬこの存在の実現に関与してもいる。存在に密着した『何』という問いが一切の思考の根源に存しているとするなら（中略）、どんな探索、どんな哲学も、存在論、存在者の存在の知解、存在することの知解をその源泉とすることになろう。その限りで、存在はこのうえもない謎であるのみならず、もっとも知解可能なものでもあることになろう。にもかかわらず、この知解可能性が問いと化すのである。知解可能性が問いと化す――驚くべきことだ。この驚くべき事態こそ、『誰』、『何』という問いに先立って解決すべき問題である。」(AQE.44)

(5) 顔の現前と顔の痕跡を巡っては、『全体性と無限』と『存在の彼方へ』で論の構えに変化が見られるのは知られる通りであるが、ここでは詳細に立ち入らない。例えば熊野純彦(1999)『レヴィナス―移ろいゆくものへの視線』岩波書店 p.231。

(6) この考察からすると、実際に現場で行われる会話としてのインタビューと、そのインタビューを基に後に記事としてまとめられ新聞／雑誌などに掲載されるインタビュー記事との違いも明らかとなろう。インタビュー記事は、取材した記者や編集者がインタビューを録音したテープや、取材メモ（テープに録音しない場合もある）から、インタビュイーが語った言葉を再構成して編集される。編集記事は私がインタビュイーの言葉を理解した内容であるゆえに、その記事中に居、語っている他者は「措定された項としての他者」であって、「対話者としての他者」ではない。インタビュー記事中のインタビュアーとインタビュイーは、同じ現在という時間にいて、共時的で対称的な関係にある。「対話者としての他者」、実際のインタビューに現出した「顔」をそこに探そうとすれば、それは記事としてまとめられずに、録音テープの中にあって切り捨てられたインタビュイーの言葉の中に、彼／彼女の声という痕跡として残されているだけであろう。取材メモだけしか残っていない場合は、その痕跡も失われている。

（きしださとし　臨床哲学・博士後期課程）